



復刻の辞

◎一九四三年八月二〇日、『文学報国』は日本文学報国会の機関紙として創刊された。日本文学報国会は前年一九四二年五月、太平洋戦争完遂のための国策の周知徹底と宣伝普及のため、情報局の指導により発足した。本紙は日本文学報国会が日本芸術中央会を統合し、その機関紙であった『日本芸芸新聞』を吸収合併、改題したものである。

◎日本文学報国会は「全日本文学者の総力を結集して、皇国の伝統と理想とを顕現する日本文学を確立し、皇道文化の宣揚に翼賛する」ことを目的としており、一部の例外を除き當時のすべての文学者が参加した。

◎紙面には国家統合の名のもとに軍部と密接な関係を結んだ文学者の姿勢が克明に映しだされる。第一回・第三回大東亜文学者大会、大東亜共同宣言作品化、文学者総決起大会などの記事にみられるように、大東亜共榮圏の文

化建設という国策が大きく反映されている。

◎言論はもとよりすべての表現の自由が死滅したに近い状況下、軍部に迎合し積極的に聖戦への文学者の加担を謳う公式的な常套句が紙面を飾る一方、慎重に表現を選びながらも極限下の文学者の最後の良心が噴出していることは注目される。このことは当時の数少なくなった他の新聞雑誌にはみられず、皮肉なことにひとり『文学報国』にのみ発見できる

戦時下の文学者の動向を記録する幻の第一級資料 全四八号を完全復刻！『日本芸芸新聞』の後継紙

文學報國

●一九四三(昭18)年八月～一九四五(昭20)年四月

不二出版

民防空と文学者

活躍した頭脳の勇士

要望される報道の確立

日本國報音書院ニシミツは、本邦の並海からジオを通じて「近づけ」を以て能を取行す。バズー音書院等の作成の他は、戦闘への懸念で、この攻撃作戦の他にも、震災は日本に對する敵意を示すものである。これは、敵が日本本土を襲撃するが、これまでのところは日本に對する敵意を示すものではないが、今日における敵の推進は、正面攻撃中の攻撃距離に對する敵意とあわせて、はるかに大きくなる。北九州空襲にても、やはり敵は敵意を示すが、大きな間隔であり、軍艦、陸軍、空軍の心臓を突くべく、明らかに空襲をもつた本邦のものである。本會においては、かねてより「非軍事化」の活動といふ問題に着目し、諸々頗る熱心つゝ、あつたが、このたび事務局より、米特企画室長、井上副官長の兩名を北九州空襲地に派遣。各方面よりの慰問を行はしめた。現地に於ける各會々員議論のめまといは、豈むとものの戦闘登記を撮影したが、今回の空襲、井上副官長の意見、實績よりて、より具体的より詳細な報告を得たことは、豈やくもの非軍事化に資すべき獻策であつた。

◎十五年戦争末期の日本の文化状況をあますところなく伝える本紙を全号揃え、文化の國家統合と文学者の戦争協力そして抵抗の問題を問う第一級資料として提供するものである。

不二出版

●推せんのことば

<五十音順>

戦時下の
傷痕の記録

満州文學界の動向



軍人援護と文學

尾崎秀樹

『文學報國』は日本文學報国会の機関紙として、昭和十八年八月二十日号から二十年四月十日号まで四十八号が発行された。日本文學報国会は昭和十七年五月に成立した文學者の一元的な國策的組織で、その目的は國家の要請に従い、國策の周知徹底のための宣伝普及につとめ、その実践に協力することだった。報国会は三次にわたる大東亞文學者大会の開催、大東亞共同宣言の五大原則の文学作品化、建艦運動の一助としての小説集の刊行、「國民座右銘」「愛國百人一首」の選定、「大東亞戰詩集・歌集」の編纂、辻小説や辻詩の制作、文藝報國運動の講演会、古典作家の顕彰祭などを行っている。『文學報國』はそれら公的な動きをしめすとともに、文學者それぞれの対応を語つており、戦時下に筆で活ける作家・文學者たちの苦渋に満ちた一面をも読むことのできる貴重な資料だ。发行人の久米正雄は昭和二十年四月の機構改革で、自由主義者として退任させられるが、その後となつた四十八号は、大空襲のため事務局・印刷所ともに焼失し、ガリ版刷りとなつてゐるのも、戦争の傷痕をまさと物語る。

(おざき・ほつき 作家)

昭和文學研究の
第一級資料

頃聞の樂民國

小田切進

『文學報國』は昭和文學研究の最も大事な、基本的文献の一つである。それが長く手にできないどころか、のぞき見ることさえ容易にできなかつたのだから、復刻されるとは有難い。

かつて戦争下の文學・芸術の研究会が組織され、昭和一〇年代の散逸した文献を協力して調査追及した。猪野謙二・平野謙・久保田正文・竹内好・尾崎秀樹・安田武・橋川文三・鶴見俊輔さんたちがいたと思う。研究は昭和三六、七年の『文學』に四回にわたつて特集されたが、その時の成果にあづかつて私も『日本學芸新聞』『文學報國』の写真版をわけてもらつた。しかし手を尽くしたが『文學報國』は欠号が探しだせず、ついに終刊も突きとめ得なかつた。それでも余りに貴重なので、『現代文芸綱覧』補巻に、欠けたところのあるまま、細目を編んで収めた。こんどはその欠号も探し出され、室生犀星・太宰治・織田作之助・壺井栄らの短編小説、宇野浩一・柳田泉・舟橋聖一・小島政二郎・中谷博・吉田精一らの座談会「明治大正文學選」三回、伊藤整・山本健吉・丸岡明・渋川驍・唐木順三らの「文芸時評」等々が載つた全号がそろえられ、ガリ版刷り終刊号までが完璧な形で復刻されるという。望んでも困難だったので、有難く、感謝にたえない。

(おだぎり・すすむ 立教大學名譽教授)

格志有

時文評

門義條東

論說

決戦朝鮮を見る

勤勞報國隊に参加せよ

時文評

『文學報國』
コピーリンク

久保田 正文

一九六一年の夏、私は『文學報國』を読んだ。『文學』編集部が、そのコピーを持ってきて文章を書けということであつた。その年の一二月号に、私の『文學報國』をよむ』は発表されている。

あの頃コピー技術は幼稚なもので、私に渡されたのは、青写真版であった。私はまだ若かったから、ところどころ読みにくいくらいではある。私は手書きでそれを写し、新潮社出版品集に容れた。

『文學報國』のコピーを持つていいかという問い合わせは、その後ずいぶん来た。もちろん、あの青写真版は原稿と一緒に返却してしまつたから、残念ながらすべてお引き取りねがうよりほかなかつた。

古い人間の私は、ラジオやテレビやくらいは別として、すべての文明機器に拒絶的である。ワープロなどといふものの恩恵にこうむろうとは、力も思ひぬ。しかし三十年経つた今、『文學報國』が、青写真時代とまったく装いをあらたにして、拡大鏡をつかわなくとも隅から隅までよくことのできることになつたのは、やはりありがたい。私じしんも、たくさん問い合わせから解放されることになるわけである。

(くぼた・まさぶみ 文芸評論家)

『文学報国』関連年表

一九四五年・日本、敗戦	日本、敗戦
一九四四年・横浜事件	情報局の申し渡しにより
一九四三年・日本出版文化協会発展的解消、日本文	学報国会機関紙となり、同会が発行所となる
一九四二年・日本出版文化協会解散、日本文	学報国会創立
一九四一年・日本文芸中央会発足	小林秀雄「無常といふ事」
一九三九年・大陸開拓文芸懇話会結成	太宰治「走れメロス」
一九三九年・大正十二年・日本文芸中央会発足	田中英光「オリンポスの果実」
一九三八年・國家総動員法公布	火野葦平「麦と兵隊」
一九三七年・日本讀書新聞創刊	草野心平「蛙」
一九三六年・新興文芸社より『日本學芸新聞』創刊	信長・秀吉・家康行
一九三五年・新聞文芸社より『日本學	增海戰・丹羽文雄
一九三四年・小林多喜二「蟹工船」	刷隨筆歲時記・森田たま
一九三三年・石坂洋次郎「若い人」	古今和歌集・B6四〇頁
一九三二年・五・一五事件	舊民族政治學の理論研究
一九三一年・満州事変始まる	平野翠太郎著
一九三〇年・林芙美子『放浪記』	古今和歌集・B6三〇頁
一九二九年・小林多喜二「虐殺さる」	大助貞著
一九二七年・日本讀書新聞創刊	古今和歌集・B6二〇頁
一九二六年・窪川稻子「くれなゐ」	日本評論社新刊
一九二五年・新興文芸社より『日本學	日本評論社新刊
一九二四年・石川達三「生きてゐる兵	日本評論社新刊
一九二三年・林芙美子『蟹工船』	日本評論社新刊
一九二二年・五・一五事件	日本評論社新刊
一九二一年・満州事変始まる	日本評論社新刊
一九二〇年・小林多喜二「蟹工船」	日本評論社新刊
一九一九年・川合仁・新聞文芸社設立	日本評論社新刊

創刊を祝す

原 悅 藏
夙夜奮闘でもある。夙夜奮闘でもある。夙夜奮闘でもある。

夙夜奮闘でもある。

皇國文化の昂揚

日本少国民文
化問題研究会 小野俊一

私的研究してゐる日本少国民文
化問題研究会 小野俊一

世界政治の必然

杉森孝次郎著
(昭和五〇・月・日曜)

方針を解明す。B6二〇一・月・六〇二・五

世界政治の必然

杉森孝次郎著
(昭和五〇・月・日曜)

方針を解明す。B6二〇一・月・六〇二・五

『文学報国』関連年表

(昭和四) 小林多喜二「蟹工船」

一九三〇年・林芙美子『放浪記』

一九三一年・小林多喜二「虐殺さる」

一九三二年・満州事変始まる

一九三三年・石坂洋次郎「若い人」

一九三四年・新興文芸社より『日本學芸新聞』創刊

一九三五年・新聞文芸社より『日本學』

一九三六年・窪川稻子「くれなゐ」

一九三七年・日本讀書新聞創刊

一九三八年・日本讀書新聞創刊

一九三九年・大陸開拓文芸懇話会結成

一九四〇年・戦時統制のため文芸通信社八社が統合され「日本學芸通訊社」を設立

第一回目の本格的用紙統制

火野葦平「麦と兵隊」

草野心平「蛙」

信長・秀吉・家康行

増海戰・丹羽文雄

一九四一年・日本文芸中央会発足

一九四二年・太平洋戦争始まる

一九四三年・日本出版文化協会発展的解消、日本文

学報国会機関紙となり、同会が発行所となる

小林秀雄「無常といふ事」

『日本學芸新聞』創刊、改題され『文学報国』創刊

徳永直『光をかゞぐる人』

中央公論社・改造社・解散

●復刻版『文学報国』概要

概要——一九四三(昭18)年八月二〇日～一九四五(昭20)年四月一〇日

全四八号+解題・解説・総目次・索引付き

A3判・上製・函入・総一六〇ページ

解題——山内祥史(神戸女学院大学教授)

解説——高橋新太郎(学習院女子短期大学教授)

推薦——尾崎秀樹・小田切進・久保田正文

本体価格——一八、〇〇〇円

刊行——一九九〇年一二月

●前身紙『日本学芸新聞』復刻版概要(既刊)

概要——一九三五(昭10)年一一月～一九四三(昭18)年七月

全三巻(全一五五号)・別冊一・付録一

B4判・上製・函入・総一、一〇四ページ

別冊——解説・回想・総目次・索引(別冊のみ分売可・二、〇〇〇円)

付録——『文芸思想講演集』(一九三七年刊・四六判並製八二ページ)

解説——香内信子・香内三郎

回想——遠藤斌

推薦——尾崎秀樹・杉野要吉・日高六郎・松尾尊児

本体価格——六五、〇〇〇円(分売不可)

不出版

振替 東京都文京区向丘一-二-一-二
TEL 03(812)4433
FAX 03(812)4464
〔東京〕六一九四〇八四

○弊社は注文制です。
○お近くの書店へご注文ください。
○本カタログ中の表示価格は、
全て消費税を含んでおりません。